

## 団地ルネッサンス

標記特集が 2010 年 3 月発行の『City&Life』で組まれた。巻頭を紹介しよう。「団地」という言葉はもともと「一団の土地」という法律用語から産まれたという。それが一般化したのは 1958 年。この都市の 7 月に発行された『週刊朝日』の特集で、主に RC 造、ボックス型の集合住宅に暮らす人々を、『ダンチ族』と呼んだ影響が大きいようだ。

全国各地の公団住宅が紹介されていたが、千葉県松戸市の常盤平団地のスターハウス（星型住棟）に目が向かった。スターハウスには「思い出」がある。父が高山に転勤になる前だったと思うが、名古屋の自由が丘に家族で見に行ったことがある。当時としては、モダンで風通しの良さそうなスターハウスで住んでみたかった。「夢」は実現しなかったが、ネットで調べて桜が満開の頃にスターハウスに会いに行った。



緑区の鳴子団地は昭和 30 年代の名古屋支所で最大の公団住宅である。ひとつの団地の中に、スターハウスとボックス型ポイントハウスが混在するという、珍しい住棟配置をしている。大きな団地の中で、スターハウスが目立っていた。満開の桜と調和しており、歴史と風格を感じさせた。半世紀ほど前に見たスターハウスを思い出しながら、団地をあとにした。



特集のインタビューで、神戸大学の平山洋介さんが次のように語っている。「とくに古い団地は緑が多いし、散歩ができるので、周辺の人も喜んでいる。よく公共住宅は不公平だという話があります、入居できる人、できない人がいる。でも、環境形成という面から考えると、団地は公共性が高い空間をつくったんだと思います。それをきちっと評価せずに切り売りしようというのは拙速です。処分してしまえば、二度とつくりえない。せっかく蓄積してきた良質の環境ストックなんですから、もっときちんと評価する必要があります。」鳴子団地をすこし歩いてみて、同じような考えをもった。

(2010 年 5 月 7 日 記)